

国際関連情報 Report from CMAC

CMAC 会議 (2012 年 2 月) 出席報告

公益社団法人日本証券アナリスト協会 参与・教育第二企画部長 **金子 誠一**
かねこ せいいち

2月22日にロンドンで開催された国際会計基準審議会 (IASB) の CMAC 会議*について概要を下記のとおり報告する。

* IASB と世界のアナリストとの会議。第 1 回会合は 2003 年秋。当協会は 2004 年 2 月の第 2 回会議から出席。会議は年 3 回、IFRS 諮問会議 (IFRS-AC) の前後にロンドンで 1 日かけて行われる。日米欧のアナリスト 10 名前後、IASB の理事 5 名前後、スタッフ数名出席。当初は Tweedie 議長 (当時) の私的アドバイザー会議の色彩が強かったが、IASB の会員向けニュースレター (Insight, July, 2005) で紹介され、2007 年 6 月の会議からは公開 (傍聴可) となっており、公的な性格を強めている。設立以来、Analyst Representative Group (アナリスト代表者会議) と呼ばれていたが、2011 年 6 月の定款作成と同時に Capital Markets Advisory Committee (資本市場諮問委員会) と改称した。

1. 出席者

IASB 理事：

Hans Hoogervorst (議長)
Ian Mackintosh (副議長)
Jan Engstrom

Stephen Cooper
Patrick Finnegan
Takatsugu Ochi
Darrel Scott

Analysts :

Martin Bos (Eumedion、蘭)
Neri Bukspan (S&P、米)
Christian Dreyer (年金コンサルタント、スイス)
Peter Elwin (JP Morgan、英)
Jane Fuller (コンサルタント、英)
Jacque de Greling (CDC、仏)
Javier Frutos (BBVA、西)
Sue Harding (英)
Dennis Jullens (UBS、蘭)
Sei-Ichi Kaneko (SAAJ、日)
Robert Morgan (コンサルタント、加)
Dane Mott (JP Morgan、米)
Vincent Papa (CFA Institute、英)
Mark Prentice (State Street、アイルランド)
Jed Wrigley (Fidelity、英)

2. 議事一覧

番号	日時	議事
(1)	22日 9:00-10:00	EFRAG/FASB ディスクロージャー・フレームワーク
(2)	同 10:00-10:30	金融商品
(3)	同 10:45-11:30	リース
(4)	同 11:30-12:00	ESMA 重要性についてのペーパー
(5)	同 13:15-14:00	投資企業
(6)	同 14:00-14:45	収益認識
(7)	同 15:00-16:00	IFRS 第8号 適用後レビュー
(8)	同 16:00-16:20	IFRS 第10~12号発効日

* 会議資料および録音は以下から入手できる。
<http://www.ifrs.org/Meetings/CMAC+meeting+February+2012.htm>

3. 議事概要

上記の番号に従い、筆者の発言にも触れながら議事概要を報告する。

(1) ディスクロージャー・フレームワーク

欧州財務報告諮問グループ (EFRAG) と米国財務会計基準審議会 (FASB) より、それぞれの検討内容の報告があった。EFRAG は注記を減らすことを目的、FASB はフレームワークの設定を目的にしているが、実際には注記が作業の中心。年末までに解決策を提案するペーパーを出したいとしていた。

CMAC メンバーからは、注記が多すぎると文句を言ったユーザーはいないはずだ、clutter (ゴミ) を減らすことを目的にすべきで、volume (量) を減らすのを目的にするのはおかしい、という意見がある一方、たとえば、会計方針の説明や、棚卸資産の評価など、変化がない場合には簡略化、または省略できるものもある

はずだという意見もあった。

筆者は次の意見を述べた。「日本のユーザーの中には重要性の判断に業種の概念をいれるべきと考えている人たちがいる。たとえば、収益認識の公開草案における長期契約の内訳等開示は建設、造船、ソフト開発等、長期契約がビジネスの中核になっている業種だけでいい。ほかの業種は、形式的に重要と判断されても開示は不要である。重要性の定義に業種概念を上手に取り込めば、ユーザーは喜び、作成者の負担感軽減にもつながるのではないか。」

Mackintosh 副議長から、開示フレームワークに対するニーズは強く、取り上げるのは確実。リサーチの課題と考えられるので外部資源も活用したい。第4四半期までに方向性を出したいとの結びのコメントがあった。

(2) 金融商品

金融商品の減損について IASB が検討中の案について担当者から説明があった。正常資産から不良資産への移行、および不良資産から正常

資産への戻しについては賛成する意見が多かったが、Bucket 1（正常）、Bucket 2（不良、ポートフォリオ・ベース）、Bucket 3（不良、個別資産ベース）への3分法については意見が分かれた。

(3) リース

IASBはオペレーティング・リースとファイナンス・リースの区分をなくし、長期リースはすべてオンバランス化する方針であるが、この場合、従来のファイナンス・リースと同じ処理を行うとオペレーティング・リース的なリースでも契約当初の費用負担が大きくなるという問題（front loading）が生じるため費用処理の方法を検討中である。次の3種の方法について意見を求められた。

- ① リースを非金融資産の取得とそのためのファイナンスとみなす。償却費用と利息費用から front loading が生じる。2月時点でIASBが暫定合意していた案。
- ② 利息償却アプローチ。通常のリースの場合、利息費用は通減、償却費は通増するため各期のリース費用総額は平準化される。
- ③ 原資産アプローチ。借り手はリース資産の返還義務を負っていると考え。通常のリースの場合、若干の front loading が生じるが、土地のリースの場合にはリース費用は平準化される。

筆者は次の意見を述べた。「単純なので①を支持。②は長期リースの場合、借入金で資産を購入した場合に比べて、front under loading が生じる。③は複雑すぎる。」

どの案を支持するか挙手したところ、①が5人、②が2人、③が5人。②の人に①か③の選択を聞いたところ2人とも③を選択した。

(4) ESMA 重要性についてのペーパー

欧州証券市場機構（ESMA）がまとめて、

パブリックコメントに出している重要性についてのペーパーについての説明と議論。CMACメンバーには証券市場監督者であるESMAが会計基準の根幹に関わる重要性について意見を出していることに警戒的な見方が多かった。最後にMackintosh副議長が「関係者を助けようという意図であり、新たな規制を課するものではない。IASBもTrusteesからIFRS導入のガイダンスの充実やIFRS解釈指針委員会をよりuser friendlyにすることを求められており、新たな規制を避けつつ関係者を実質的に支援する必要がある」とコメントしていた。

(5) 投資企業

IASBとFASBは投資企業と定義される企業の投資先が支配されていると判断される場合でも、連結ではなく時価評価することを認める基準を開発中である。この案について意見を求められたが、時価評価の方が投資企業の業務実態からみて適切であるという意見がコンセンサスであった。ただし、単なる時価評価だけではなく投資先の内容等に関する開示が必要という意見が支持を受けた。投資企業の親会社が非投資企業である場合、孫会社にあたる投資先企業の取扱い（連結するか、時価評価するか）については意見が分かれた。

(6) 収益認識

IASBの収益認識再公開草案は多くの開示を求めており、作成者側から負担軽減を求める声が強。CMACメンバーからはIASBの開示案を支持する声が多かった。筆者は「重要性への配慮は必要であるが、日本のユーザーの中にも長期契約を業務の主体にする企業でこれまで、公開草案が提案するような開示がなかったのが不思議という声がある。」

IASBのスタッフからは、「重要性から開示の必要がない会社もある。また、セグメント情

報との重複については何らかの配慮をしたい」とのコメントがあった。

(7) IFRS 第8号 適用後レビュー

IFRS のセグメント情報は 2009 年以降、IFRS 第8号によって、経営管理に用いる事業区分による報告（マネジメント・アプローチ）が行われている。これによって、財務諸表利用者が経営者と同じ情報を共有できるという意見がある一方、企業間の比較可能性が損なわれたという見方もある。IASB は適用後レビューの第1弾として、IFRS 第8号を取り上げる予定である。わが国でも1年前から IFRS 第8号とほぼ同様の基準による開示が行われているところから、筆者は「日本のアナリスト協会としても適用後レビューに協力したい」と述べた。

(8) IFRS 第10号～第12号発効日

EFRAG は IFRS 第10～12号（連結関連の基準）の欧州での適用を1年遅らせるという案を提示している。これについて、意見を求められたが、1年遅れても大差ないという意見が大勢であった。